

# 詩の授業 「ぶらんこ」

国語の学習は、今、「詩」の単元に入っています。その学習のようすを記録してみました。

【この詩で学習することのねらい】  
国語の学習、特に読みの学習で大事なものは、言葉から情景を読み描いたり、人物の気持ちによりそって考える力です。

「ぶらんこ」 (一年生の児童詩)  
ぶらんこにのりたいなあ  
だれもないまに  
百  
ぶらんこにのりたいなあ

この詩は、1年生の子どもが作った詩で、短い、やさしい詩ですが、この子は、どこで、どうしている時に作った詩なのだろうか、と考えるみると、さまざまな想像ができます。「ぶらんこにのりたいなあ」だけ、たくさんの子が順番を待っていて、なかなか自分の番がまわってこなくて、いらいらしているんだ。「次の人がせかすので、しぶしぶおりたんだ。」「気が弱いから、「ぼくにも乗せて」と言えずに、すみっこでうらやましそうにみ

ているんだ。」「けがで入院している子が、窓から見ているのかも知れない。」など……。  
そういう、言葉に即した自由な想像を一人一人の中に作らせた。また、それを出し合いながら、みんなで読み合うことの楽しさにも気づかせていきたい、そんなねらいでやってみたものです。

## 【授業記録】

T (黒板に詩を書く。子どもたちは、書いていくのを追いながら読む)  
はい、こんだけの詩です。自分自分で読んでみてください。

C 読む

T 2回か3回、いろんなふうに読んでみてください

C (1回読んで、やめる子が多い。)

T はい、ただよんでるだけではしょうもないんで、これを書いた男の子は、どこで、なにをしているときに作った詩かなあって、考えながら読んで。

C (すぐ手を上げる子もある)

C (まだ集中して読んでいるふうではない)

T 先生の言ったことわかった？この詩を書いた作者の子は、今どこで何をしながらこの詩を書いたのかな、考えてください。(C うん、わかった、という声)

C 読む

C 「百」て何？

T 百って何かな。みんなどう思う？

邦臣 百回

短い、やさしい詩だから、ただ、「読みなさい」だけでは子どもたちの読もうとする意志は弱い。  
読みを意識化するための指示。

こういう子もいるのだ。

T 百回っていう意味だね。

大裕 回って、かいといて。

T 書いてないけど、そういう意味ね。

はい、勝仁くん、一度読んでみてください。

勝仁 読む

T はい、朝子さん読んで。

朝子 読む (うらやましそうに「のりたいなあ」)

T いいねえ。今の朝子さんの、「のりたいなあ」というところがよかったですね。

紗織 私も読みたい！(読む。「のりたいなあ」が、さびしそうな感じで読む)

T おっ、ちがったねえ。「のりたいなあ」

C やりたい

T 哲也君読んで。

C 也 (読む)

T ほう、またちがうね。「百 のりたいな。」「のりたいなあ」というのとちがうねえ。

はい、和樹君、読んでくれる？

和樹 (読む。わりと軽い感じで。)

T ああ。もつとちがう読み方する人あるかな。はい、大裕君。

大裕 (読む。いそいで読もうとするので、もういちどゆっくり読むように指示。)

T よし。はい、佑子さん

佑子 (読む。うらやましさがよく出ている)

T 「のりたいなあ」という感じやね。はい、麻由さん。

麻由 (読む。これもいい読み)

T いいねえ。

じゃあ、ここにぶらんこがありますよ。(黒板に絵をかく) 遊園地かど

こかわからないけど。そこは

みんなで考えて。(C 遊園地や) 学校の運動場かもしれないけどね。

今、これを書いた子は、どこに……どこからこのぶらんこを見ていると思いますか？

C 部屋！

直也 学校のな、学校の休み時間のときな、学校のな、うんとな

T ほう。ちよっと、直也君、立ってはつきり言ってくれろ？

直也 学校の休み時間のときに、学校の部屋からみてやるの。

T ほう。

宏 家の部屋かもしれん。

まだ、全体に散漫な感じで読んでるので、指名読みに変えて、読みに集中させようとしてみた

少し、このあたりから子どもの顔が前を向いてくる感じ。

詩の中身にはふれずに、どんどん指名して読ませている。一つには、読ませることで、学習の中に引き入れようとしている。もう一つには、一人ひとりの微妙な読みの違いを指摘していくことで、ただ、単純な詩だとかるく受け止めている子どもたちの意識を「これは何かいるんなことがありそうだぞ」という気にさせていこうとしている。

次の問いをみんなに確実に入れたいから、黒板にぶらんこの絵を書いて状況を具体的に描かせようとした。

ここまでは、ぼんやりしていた直也君が急に生き生きと動き出す。やはり、明確な問題がないと、子どもの集中もないのだと改めて思う

C はい、先生、わけもある。

T ちょっと待って。直也君は、こんなこと言ってますよ。直也君の言わったのわかった人。はい、だれか、もういつペン言うたって。はい、麻由さん。

麻由 あんな、直也君はなあ、学校のまどから休み時間にぶらんこにのりたいたいと思ってるの。

T ほと、今ここから見てやるわけね。(黒板に書く)ほして、見ながら「ぶらんこにのりたいなあ」で思ってるのね。

麻由 休み時間とちがうときに乗ったらなあ、だれもきやらへん。

T おつ、ちょっとおもしろいこといったぞ。もういつペンいつて。

麻由 休み時間とちがう時乗ったらだれもいやらへんで、一人で乗れる。

T ほう。直也君は休み時間や、いわったけど、麻由さんは、ひよっとしたら勉強中かもしれん。

麻由 先生、もう一つある。

有香 ずっとみてやったのかもしれへん。

T おつ、何？有香さん

有香 勉強中も見えてやったのかもしれへん。

T 勉強中やのに、ちょっと外見たら、ぶらんこがからっぽやったのかな「今行ったら、だれもないから、百でも思いきりのれるのになあ」で思ってた。

紗織 先生、ふうやったら、勉強の時はだれもないけどなあ、休み時間の時とかはな、みんなにとられてしまうから、勉強中にぶらんこをながめてやるの。

T ああ。おもしろいね。今、紗織さんのいわったの、わかった？

わかった人。勝仁君。

勝仁 ……

T 宣彦君、言うたって。

宣彦 うんとな、勉強中やったらな、だれものってやらへんでな、休み時間やったらな、みんなにとられる。

T 休み時間やったら、ここにいっぱいいいやるから、乗りたくても乗れないのね。

大裕 ほんなんぜつたいむりやわ。百も乗るの。

T 百回なんてぜつたいむりやね。

だから、今、たまたま勉強中で、今やったら乗れるのになあ、と思つてつくらった。

じゃあ、いつペンそういうつもりで、教室からながめているつもりで読んで。紗織さん。

紗織 読む

T いいねえ。一人でつぶやいてるみたいね。

はい、じゃ、もつとちがうこと思いついた人ある？

まだ、友達の見聞力を弱い子どもたちだから、聞き合うことを意識的に訓練しようとしている。

麻由さんは、直也君の考えをさらに具体的なものにしてはいるのだが、私の受け止めは、ずれている。自分の解釈に都合よいものにすりかえてしまっている。

でも、それなりに、子どもたちは受け止め、発展させていってくれている。有香さん、紗織さんと。

こういうところで、みんな読んでみる、という場があったほうが、よ

麻由 先生、もう一つある。

T もう一つ考えた？はい、どうぞ。

麻由 もし、病院の横に公園があったら、入院していたら、乗りたくても乗れないから、そういったと思う。

C (口々にいい出す)

龍法 おんなじ。

C 「はまべのいす」みたい

T はい(龍法をさす)

龍法 病院のところからぶらんこみてやる。あんな、なんか足とかけがして(他の子も口々に言う)

T 龍法君の話を聞いて、たしてくれたい。龍法君だけで言って。

龍法 あんな、病院にいててな、歩けへん病氣してやってな、外へもでられへんさかいな、あんな、乗りたいなと思ってるの。

宏 けがして！

T 西津君言って

宏 早くけががおつてほしい。

T ああ、今足か何かをけがして動けないのね。だから、百回も乗れないのね。はい、じゃ、今の西津君や、龍法君によくた考えの人。

はい、じゃ邦臣くん。

邦臣 病院でな、足とかけがしてたらな、ぶらんこにのれへんさかいな、ほやさかい、なんか、ながめてやるの。

T はい、もつと他に考えた人。勝仁君

勝仁 心で乗りたいと思ってるの。

T うん？もういっぺん言って。

勝仁 心で乗りたいと思ってるの。

T 心で乗りたいと思ってるの。うん。どこで。この人はどこにいて思ってるの？

勝仁 病院で。

T ああ、病院の中でね。…：あつ、そうか、ひよつとしたら外を見ていないのかもしれないね。暗い部屋のベッドの上で、「のりたいなあ」て思ってるのかもしれない。じゃ、そういうつもりで勝仁君読んでみて。その気持ちになつて。

勝仁 読む

T はい、二つ出た。学校。病院。もつと他に考えた人、ある？

直也 うんとな、公園へ行ってな、一人で遊んでてな、ほんで、みんながいっばいぶらんこによつてきやってな、ぼくも、ぶらんこにのりたいな、て思つてみてやるの。

智将 おんなじ！

T はい、智将君。

智将 うんとな、なんか公園とか行ってな、ぶらんこがあつてな、ほこに

かつたと思う。まだ話合いに入り切れないでいる子どもたちを引き込むために。

教科書の教材「はまべのいす」の情景と重ねているせいも、ここでは、にわかに子どもたちが活気づいていく。

勝仁君は、そこまで思っていないかったのかもしれない。勝仁君の意見を聞いている時、ふつと新しい読みが自分の中に生まれたので、思わずそれをしゃべりたくなつてしまった。

な、先にみんなが乗ってやったでな、自分ものりたいたいなあつて思ったん。  
T そうすると、ここでいっぱい乗ってやるのね。そこへぼくがやってきた。で、それを見て、乗りたいんやけど、いっぱいやるから乗れないのね。

紗織 先生。にているところもある。「はまべのいす」と。

T はい、紗織さん。

紗織 あんな、病院に寝てやたらな、「はまべのいす」とおんなじでながめてやるのとな、同じと思う

T じゃ、もうちよつと聞いてみよう。哲也君はどんなふうに思った？

今出た中のどれがぼくの気持ちとおうたる？

哲也……

T 学校の窓から、というのがあつたね。病院から見ているというのもあつたね。哲也君のすきなのは、どれ？

哲也……

T 和樹君はどう？

和樹 ……

T はい、じゃあ、こんどはね、ノートにね、まずこの詩をていねいに書いてください。その次にね、今いくつも話が出たけどね。ぼくは、きっとこの人は、ここで、こんなことをしているときに作った詩だろうな、というのを自分で想像して書いて下さい。

C (書く作業に入る)

略

【子どもたちのノートから】

(佐藤美由紀)

この子はぶらんこにのつたことがないのかな。もしそうだったらかわいそうだな。きっとこの子ははずかしがりやみたいだな。でもかわいそうだな。そのこはいつもぶらんこをがっこうのきょうしつからみているんだらうな。

(廣瀬有香)

この詩を書いた男の子は、ゆうきのない男の子だと思う。それは、ふつうだったら、「かわって」とかいうけど、いわないからゆうきのない子だと思う。わたしは、学校から見えていたと思う。

(中野洋志)

ぶらんこにのりたいたい。でもまだべんきょうちゆうだから、のれない。早く休みじかんにならないかな。

(国寄佑子)

このこは、きつと体のふじゆうなこでいちども、ぶらんこにのつたことがない。みんなのたのしさを、病院のまどから見て、そうおもった。

これ以上話合いで続けても、発展しにくいだろうと判断した。それで、気分を変えて、視写、自分の読みの書き込み、という個人学習に入った。授業時間終わり10分ほどで、ノートに書いた自分の読みを発表しあつて終わる。